

蓬萊町だより

第 九 号
昭和五十九年十一月二十日
発行 蓬萊町会
編集 蓬萊町会

蓬萊町界限(その六)

旧制 郁文館中学(Ⅱ)

林 順 信

最近になって、肴町に用足しに行くのに、なるべく郁文館の塀ぞいに、海蔵寺のわきを通って歩くことにした。昭和二十年三月十日の上空襲で、七番地にあった私の家が焼けるまで、お世話になった蓬萊町会のこと、少しでも記憶の糸口をたぐることができたらと思うからである。

郁文館の正面は、現在の辻宝文堂の直前にあって、今、石の門柱の片方、恐らく左側の門柱が残っている。これは、大昔にはなく、恐らく昭和十四年の、創立五十周年の時に、鉄筋コンクリートの新校舎と、正門を入った左側の庭園と共にこしらえたのだろう。門を入ると左側に、にわかに植木の植え込みが作られて、八重桜、楓、樺や、山吹、沈丁花などの灌木や低木が、一どきに植えられて、その真中に、二宮金次郎の銅像が建てられた。中程に小さな水道を持った砂場があったと思う。その砂場は、隣近所の

女の子の遊び場で、男の子は余り近寄らなかった。

郁文館中学の西側には、今も昔の通り細い路地があった。恩田さんと倉田さんのところには、岡田海軍少将のお邸があって、この界限のお大尽といった感じであった。岡田少将は、海軍だったので滅多にお顔を見ることはなかった。男の子が何人かいて、私の二級下に、まことさんというのがいて、よく遊んだ。一見貴公子然として、当時の子供としては身綺麗であった。相上の方にお兄さんがいて、本郷中学(本中)から旧制佐賀高校を経て東大農科に行かれたと思う。岡田さんの庭は北の方に向かって、かなり広く、家の西側には井戸があった。岡田さんの住む前は、柳沢というおばあさんが住んで居たが、この話は後日また書くつもりである。

その細い路地は、当時は石炭殻が敷いてあって、左側に、星野薪炭店があり、かわいらしい男女二人きょうだいがいた。おかみさんは、かすりのモンベ姿で、手拭いであねさんかぶりをして、いつもかいがいしく働いていた。

この路地の突きあたりは、ドブ板をまたいで、下宿屋の敷島館というのがあって、東大の学生が多く泊っていた。今日の路地はカギの手になって右の方にしか行けないが、昔は左の方にも曲がれて、左に曲がると、堤谷さんという漆器の製造卸店があった。丁度私と同じ位の男の子

がいて、たしか石川県輪島の出身ということで、男の人や女の子の何人も働いていて、外には、お膳やお椀が干してあった。

いま笹生善作さんの方に右折する道は昔からあって、左に蓬萊町二十五番地があった。二十五番地には、恐らく明治時代からあったであろう、九尺二間の長屋が続いていて、その路地の真中には、ドブ板が渡してあった。その路地を東から西へドンドン歩いて行くと、所さんという家の方に出了れた。この間この路地を入って行ったら、今は行き止まりになっていて、道は誰かの家の庭の中に消えてしまっていた。二十五番地の中程の右手には、イチという兄弟がいた苗字の市川からそう呼ばれていた。おやじさんは、べっこう焼きの露天商で、根津権現はもちろん、東京市内のいたるところの縁日に「いっちゃん」の赤い横幕を下げていた。まるでユール・プリンナーみたいな、とんがり頭の持主で、私の上と下とに兄弟がいて、戦後は弟さんの方がやはり「いっちゃん」の看板で、べっこう焼き屋をやっていたが、最近姿を見かけないのが気がかりだ。二十五番地には、私と同じ年の、たしか奈良という少年がいて、トンボとりでは、イチと共にライバルだった。

二十五番地から北に歩いて行くと、左手は真浄寺の敷地で、右手には郁文館の柔道場がグラウンドの西北隅にあった。この柔道場の北側には、

わずか五十センチ程の狭い道とも言える空間があった、郁文館のグラランドに入ろうと思えばここから中に忍び込むことができた。今は、郁文館の北側に、細い横丁がついているが、戦前には道はなく、北に面する家々は、すべてグラランドに面していた。

郁文館の柔道場のわきを通ると、突き当たりから左に折れて海蔵寺と真浄寺との間を通るあたりは、今も昔も変わっていないが、北側のグラランドに面したあたりは大きく変わった。

☆グラランドに面した北側の家々

郁文館の西北の柔道場のあたりは、明治の昔、井上円了博士の哲学館大学（東洋大学）の発祥の場所であり、同時に、その二階を借りて発足した郁文館の最も古いゆかりの場所でもある。

郁文館に面してはいないが、角地のところに小山という造花をこしらえていた仕舞屋風の家があった、結構目立った。郁文館のグラランドの北に面した家々は、七ノ八軒はあったのであるが、私の記憶にあるのはその半分ほどである。それぞれの家は、庭を南に持っていて、その庭の木戸を開けると、直接郁文館のグラランドになっていた。だから、全く自分の家の庭が延長されていくみたいなのだったろう。

左の方から数えて二軒目か三軒目に、伊東という家があった、美人の姉妹と兄さんとの三人きょうだいだった。お姉さんは、たしか追分の

十佳女学校（文京学院）に、妹さんは、私と同じ京華学園の女学校へ通っていて、一級下だった。京華では級長をつとめ、目白の日本女子大学から米国へ留学されたと思う。大変な美人姉妹だったのでよく覚えている。それから右に、本郷の方で理化学器具をやっていた中林という家があった、このお父さんがなかなかモダンな人で、立教中学へ通っていた息子さんと、よく硬球で、野球の練習をしていた。考えてみると、当時、昭和十年代に、野球で遊んでくれるお父さんというのは珍しかったので、羨しく思っただけでいたのを思い出す。

中林さんの右というか、グラランドに面した家の一番右手の家は、岩佐といった。その中間が樋口という家であった。この二つの家は親せき同志で、樋口さんの方が後から引越して来た。

岩佐のお兄さんは、ひげもじゃらの、府立一中へ通っていた人で、いつも器械体操をやっている、度の強い眼鏡をかけている、大人みたいな中学生だった。遠州の天龍川のそばの出身とだけ聞かされていたが、この岩佐さんが、旧制静岡高校から東大へ進み、三井鉱山に入った、有名な野球の投手だったと、つい数年前に符合したのであった。その左隣りの樋口さんには、開成中学に通っていた人がいて、色がえらく黒かった。お父さんが台湾総督府かに出ていたと

いうから、台湾で日に焼けて来たのだろうと思った。

グラランドの東北隅には、かなり広い砂場と鉄棒があった。この砂場は、ちゃんと、走り巾跳びができる様に、踏切板が埋め込まれていた。

☆東に面した家々

私の家もそうであったが、郁文館のグラランドの東隣りは、蓬萊町ではなく、千駄木町の五十番地代が続いていて、しかも、土地が、千駄木の方が一段と高くなって居り、六十センチから九十センチ位の大谷石を積み上げて高くなっていった。以前は、郁文館の東側の家々も、ほとんど庭が一段高くなってグラランドに面していて、北側の家々が、板塀囲いで、木戸があったのに対して、東側はお木などを植えた生垣で、簡単な柴折戸を開けるとグラランドに飛び下りるといった感じであった。

その東側に面した家々の中に、秀才の兄さんがいて、夏休となると、白がすりに袴をはいて、三本筋の白線に、三高の校章をつけ、京都から帰省して、たまに、グラランドに下りて散歩していたのを、あこがれの眼ざしで眺めたのを思い出す。

一番右の方、郁文館の新校舎に近い方の二階家には、大きな豆の木があって、豆の実がよくなっていた。その太い幹の中程に、小さな洞があって、毎年、春になると雀が巣をかけた。悪車

どもは、危険を冒して木の上に登り、雀の巣をいたずらをして遊んでいた。今から考えると、当時は自然愛護などという言葉は聞かなかった。郁文館のグラウンドでは、我々はよく野球をして遊んだ。西北隅の柔道場のところに、ホームベースを置くことは、後楽園球場や東大球場とも同じである。子供同志でも、打球がよく伸びて、隣近所の庭に飛び込んで、一々、あやまって球拾いに行った。球拾いも三度や四度目ともなると、

「いい加減にしないさい。もっと広いところでやんなさいよ。」と文句を言われるのがいやで、球拾いは誰もが行きたがらなかった。

ところが、東側の、ある家の庭に飛び込んだ時だけは、競争で球を拾いに行った。なぜだろう。ある日、この家に球拾いに行った悪童が、「おれ、やになっちゃったよ。だって、あそこのおばさん、ノーブロードアレを見せるんだよ。ほんとに、まいったな。」

と、てれくさそうな顔をして帰って来た。

そういえば、たしかに、その家には、御用ききの兄さんどもが、大勢、入れかわり立ちかわり、注文とりに行っていたのを、「ハハーン」と合点できたのだった。このおばさん、御用ききの兄さんどもには、威勢よく、「ラッジャーイノ」とくるらしい。誰いうともなく、この御開帳好きのおばさんには、「出しまん」の称号を贈呈

することとなった。

それからというものの、我々悪童どもの野球に一段と熱が加わり、「出しまん」の庭に打ち込んだやつが、まさしく、ホームランでそのうち、ジャンケンで勝ったやつが、球拾いに行けることとなった。郁文館のグラウンドは、思いもかけぬ勉強をさせてくれたのだった。(続く)



町会活動の概要

昭和59年6月～10月まで(5カ月間)

総務部

6月6日 文京区青少年対策委員会
7月21日 文京区ふるさと祭パレード参加
8月25日 昭和58年度蓬萊町会総会
58年度決算及び59年度予算は、前号に報告させていただきました。

9月4日 駒本小学校30周年記念行事の一環として、当校より当町会にお住いの旧校舎(戦前)卒業の皆様へ、その当時の記念となる資料の提供依頼がありました。町会では、早速に回答をお願いしたところ、多数の方々のご協力をいただき誠に有難うございました。

防火部

7月12日 夏の防災訓練連絡会議
7月22日 文京区防災訓練実施

文京区立六中校庭に於て、午前九時から十二時まで訓練が行われ、当町会から13名が参加いたしました。

9月10日 本郷消防署防火理事會開催

防犯部

8月13日 文京区町会連合会として「覚えい 荊桐撲滅運動」の一層の推進について、当町会の各ご家庭に署名をお願いし、連合会を通じ、関係官庁に提出しました。

9月28日 秋の防犯運動打合せ会議
10月1日～10日 秋の全国防犯運動
当町会内に於ても、この10月だけで、6件にも及ぶ窃盗事件が発生しております。夜間の戸締りは勿論昼間でも留守にされる時は、近所の方へ一声かけてお願ひ、被害を受けない様、自衛に努めて下さい。

婦人部

6月7日 日本赤十字募金 金拾四万四千拾円也
10月20日 共同募金(赤い羽根)

金拾参万八千五百円也

(次頁につづく) ✓

9月10日 「敬老の日」記念行事として恒例となりました「文京区釣友会」と厚志による天ぶら会には、当町会婦人部がお手伝として奉仕いたしました。

蓬萊句会吟行

堀江 ひろし

九月二日（日曜日）駒込・六義園

蓬萊句会も五十八年四月誕生以来一年六ヶ月たちました。常々御指導いただいた。古川沛雨亭先生から吟行会が有ってもよからうとの御指摘があり、池田連木、翁松夫両氏が幹事となり計画が進みました。

初めての吟行ということで句会員一同大いにはりきりました。当日は今年の猛暑の名残りそのままの、最高気温三十四度という非常に暑い目でしたが、暑さにもめげず蓬萊句会と応援参加の人々合せて十六名は、午前中に入園名吟をものにすべく園内へ散って行きました。

六義園は元禄八年柳沢吉保が作った天下の名園で、園内をめぐりながら観賞する回遊式築山山水庭で、今も東京都の公園として手人よく当時のすばらしさを随所に残しています。

正門を入るとすぐに内庭大門があり、瓦屋根をくぐると園内は緑彩濃い見事な松が立ち並び、目前に池が広々と展開しています。

池内の蓬萊島、中ノ島が島影を水面に写し、風が来ればさざ波が立ち空には帰りおくれたつばめが二・三羽、また赤とんぼもとんでいます。

池に沿って木立の中へ入ると秋の蟬がかまびしく鳴き、ひんやりとした風が吹いてきます。木立のつき当りに小滝があり、水の音が涼しさをよんでいます。小さいながら湧になったところの水は深く澄み、瀬にはみずすましが泳ぎその足は水底に影となって、それが見えるほど明るく澄んだ秋の水でした。

名園の中で、参加者はめいめい集合時間まで十二分に句作にふけることができました。

十二時三十分、集合場所の心泉亭に集合、一人五句の囑目吟（今日目にふれた物事で作句する）と先生からお言葉があり、各自筆を走らせ出句しました。

幹事心づくしの食事のち、一時出句締切り、清記、互選と進んでいよいよ披露に移りました。池田連木、楠真幸両氏の名調子がひびき、自分の句が披露されると名のり、良い句、面白い句等あるたびに笑いや感心の声がり、にぎやか

に披露が終了しました。続いて古川先生の選及び講評があり、四時句会は終わりました。

楽しい一日を過ごし、ぜひまた吟行したいと参加者は言葉をかわしながらの散会となりました。

古川沛雨亭選

木漏日や澄みし池面に沈みけり
 一服の茶に名園の秋を飲む
 穂かに二百十日の句吟かな
 老絵師の画く老松に秋の風
 秋暑しいわれを聞きし石畳
 秋の苑池一望に松の影
 別天地秋の心で逍遙す
 風渡る木立に消えぬ秋がらす
 山水を尽しむくさのそのや秋
 秋澄むと緋色がまさる池の鯉
 鯉の背のキラリと秋の陽を返す
 四阿に翹やすめおり秋の蝶
 風澄むや浅妻舟の夢のまたゆめ
 常盤松にむくさの園の風の秋
 秋の園心の佳人立たしむる

選者詠（沛雨亭先生）
 秋草に湯呑の白湯をこぼしけり
 林泉に秋暑あまねき小径かな

頑一
 連木
 真幸
 喜一
 えみ子
 すえ
 松男
 英子
 京子
 はる子
 文江
 小匣
 可紅
 たかし
 ひろし

俳句はやさしくて楽しいものです。俳句を通して心が通いますからすぐ友人になれます。

町会の多くの方々が蓬萊句会へ参加されることをおまちしております。

(59・10・10記)

十月蓬萊句会

於海蔵寺 10月22日

天 新小豆農一筋の友と遇り

妻黙し一夜机上の秋ざくら

遠山を背にしろがねの芒かな

名月や仏金利塔のうかび立つ

土石流水曾路は哀しちろ鳴く

人脈に乗れぬ男の赤い羽根

すえ

ひろし

笑子

喜一

真幸

連木

計報

当町会にお住いの方で、6月から10月までの間に逝去された方々のご氏名は左記のとおりでございます。

謹んで弔意を申し上げ、御冥福をお祈りいたします。

石川寛三様 加藤ふで様 丸山モトオ様

小泉 慶様

蓬萊町古寺巡礼

ご存知の通り蓬萊町は江戸時代今から二百五十年前前に四軒寺町という名で創じまり、現在も十六ヶ寺がその法燈を守っております。たまに、去る十月二十日、その一つである清林寺で、草創五百年の記念法要がいとなまれ、奈良薬師寺の高田好胤管長の法話がありました。これを機に町内の十六ヶ寺の寺々をこの紙面で巡礼してみてもとの意見もありますので、先づ、清林寺をおとづれる事にします。

清林寺(東梅山花陽院清林寺)

文明十五年(一四八三)、今から五百年前浅草幡随院の末寺として、浄土宗鎮西派の観普祐崇上人によって草創されました。

祐崇上人は永正六年(一一五〇九)八十三才を以て遷化されましたが生涯に三十有余の寺を造って民衆の間に専修念仏の教を拡めました。その後領主太田道灌がその主君上杉定正の誤解を受け殺されて以来、足利、上杉、北条氏の相争う中に記録共々堂宇も類焼しこの間、百年程の事はわかりません。

徳川家康が天下を取り江戸に入府した折、徳

川氏の被護を受け天歴上人が清林寺を再興し第二代上人と仰がれました。慶長十八年(一六一三)に神田三河町から神田川柳原に移り、慶安元年(一六四八)には現在地、駒込蓬萊町に移り敷地一、〇八〇坪を拝領しています。

本尊の阿弥陀如来は室町時代の作(伝、恵心僧都作)で本年、仏師 明珍昭二氏により大修理が行われ草創当時そのまゝに静かにおだやかなお顔で結跏趺座されておられます。

この寺の本堂に向って左手に『初めて小学校でローマ字を教えた田丸陸郎』とローマ字で刻まれためづらしいお墓があります。これは、物理学者田中館愛橘博士の弟子で本職の物理学を廃ぐ情熱を「ローマ字」の普及にかけた。田丸卓郎の実弟、田丸陸郎の墓で、明治五年、岩手県盛岡で生れた兄、田丸卓郎氏には『ローマ字国字論』という著書もあります。

またこの寺に就て特筆すべき事は、昭和五十二年に発願起工して二十数年計画で完成を目ざしている。『三重塔建立』の事業です。寺の記録を拝見しますと、昭和五十九年に「第四回、三重塔用木材購入」と明記されており、現住職の不言実行のたくましさを感じられます。あくせくとした今の世に心澄む良い話です。

町 会 員 各 位 殿

蓬萊町会長 久 貝 貫 一

根津神社大祭に伴う当町会祭礼費用の収支決算報告

秋すでに深く、冷気も日々に加わる候ともなりましたが、町会員の皆様には益々ご健勝の事と存じます。さる9月22日23日両日の根津神社大祭、両日共晴天に恵まれ、また町内皆様の多大なご厚志を賜り、賑にぎしく祭礼行事を催すことが出来ました。

収 入 の 部

支 出 の 部

単位：円

収 入 項 目	金 額	摘 要	支 出 項 目	金 額	摘 要
寄 付 金	1,936,000	332件より受納	寄 付 募 金 経 費	210,900	最中、印刷費
			神 社 奉 納 金	141,000	神幸祭負担分
			設 営 費	374,294	御酒所・御飯屋
			神輿・山車渡御経費	699,630	弁当・菓子・酒 他
			消 耗 品 費	120,500	文房具・その他
雑 収 入	500		雑 費	164,100	祭礼委員食事代
			残 高	226,076	祭礼積立金へ
合 計	1,936,500		合 計	1,936,500	

収支決算を上記の通り報告します。

祭礼会計 猪熊良晃 印

竹中一馬 印

上記の件の決算について監査の結果、相違ないことを証明します。

堀江頼治 印

加藤 祐美 印

昭和59年10月12日

会計監査 川西正造 印

めっきり寒さも増してまいりました。本年も余すところ二ヶ月、当月は、お酉様、これからどちらのご家庭も暮に向ってご多忙になることでしょう。今年を振りかえれば、二、三月の異常寒波、一転して本夏は永い猛暑続き、今後の長期の気象予報によれば、この冬は暖寒との見通し、そうあってもらいたいものです。

なにはともあれ、寒さに向うこれから、町内の皆様には健康第一にお過ごし下さるように、町内に対すると意見等は、どうぞ編集部にお寄せ下さい。

編集委員

小林 吉吉 竹中一馬 猪熊良晃
高橋 一郎 翁 松夫 池田 暉

※ 次回の発行は来年2月を予定しております。

編 集 部